知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【開催日時】平成２３年１１月９日（水）

１３時３０分～１５時５０分

【会　　場】袋井市メロープラザ　１階 多機能ホール

１　出席者

・　発言者　袋井市、磐田市において様々な分野で活躍されている方

６名（男性３名、女性３名）

・　傍聴者　１７６人

２　発言意見

	項　　目	頁　数
発言者１	若者が学びあえる場づくり	4
2	マリンスポーツによるまちづくり	6
3	安心して産み、育てることができる医療環境の充実	9
4	子育て不安の解消、子どもの多文化共生	11
5	児童養護施設への支援	17
6	津波対策	19
2	指定管理者制度の弊害	28
5	「児童虐待防止静岡の集い」への参加	30
傍聴者１	浅羽海岸の浸食	31
2	ＩＴ活用ビジョンの策定	32
3	被災地のがれきの受け入れ	33

＜知事挨拶＞

皆様、こんにちは。

きょうは袋井並びに磐田の市民の皆様、またその代表の方々とお目にかかるのを大変楽しみに参りました。磐田の方は、もう２年余り前から、いやそれ以上前からいいところだなと思っていたんですけれども、きょうは磐田の渡部市長、そして袋井の原田市長、また県会議員、市会議員の先生方にもお出でいただいておりまして、市民の方々とこうして親しくお目にかかるのは、大変、ちょっともう余りに美しいところなので、すごいいいのをお持ちだなと。このお花がよく似合っていてですね。

きょうはまず磐田の総合庁舎へ行ったんです。そこはもし、大きなもしもですけれども、原発の事故が仮に発生した場合には、発生するとそこから２、３キロのところに浜岡の原発の事故の対策本部になるオフサイトセンターがあるのですが、２、３キロでは近過ぎるということで、そこがもし機能しなかったときにはどうしたらいいかと。そうすると磐田の総合庁舎だということで、そこが機能し得るかどうか見に行きました。

そこは、地震とか、あるいはほかの天災、台風とか、そういうことのためにつくられた危機管理の仕様になっているんですよ。ですが、原発に必要ないろんな情報を手に入れるためには、ＦＡＸのようなものが１つ２つ置いてあるだけで、全く機能しないということがわかりました。しかし津波なり、あるいは地震なり台風なり、その他天変地変が起こった場合には十分に対処し得るものであるということがわかったのが、まず最初の収穫でした。

そしてそこの危機管理のトップの所長が、オフサイトセンターとしては機能し得ないということを繰り返し言われていましたので、このことを細野原発担当大臣に伝えねばなりません。

その後、世界に誇るベアリングのＮＴＮの磐田製作所に渡部市長さんとも御一緒に行きまして、あれはすごいですね。今度、タイヤの中に埋め込まれるような形でモーターを動かすイン・ホイール・モーターというらしいんですけれども、これは世界で最初です。そのもう既に試作品ができていまして、そして乗りたいなと思ったら、渡部市長はもう乗っているとおっしゃいました。新しいことをする方で進取の気性に富んでいるなと思って、大したものだと感じました。そういういろいろなことに取り組んでおられている市長さんと御一緒に、試乗をさせていただきました。

ホンダシビックに登載されているインホイールの自動車と、今度は全く世界にないコミ

ューターＥＶ、エリクトリックビークルという電気自動車、これがいいと。これをどこかで走らせたいと。間もなく新東名も来年春、あるいはどんなに遅くても初夏までには開通いたしますので、そのときの何か世界に発信するそういうものになったらいいなというふうに思いました。

その後、袋井と言えばクラウンメロン、マスクメロン、最高級品ですね。これは見るも楽しく、また味わうも楽しい。１４棟もの大規模な農業経営士の立派な人物のメロン栽培の現場に参りまして、そしてどういうふうに栽培されているのかというので、そのハウスの中の扉を開けられまして、入ろうと思ったら、本当にこんなかわいいのがいっぱい、４００個の一木一果で、一木に一つのメロン、大切に大切に育てている。

見るだけでということで、じっと見ておりまして、９月に植えまして、そして１０月に交配をして、そして１カ月たった今ちょうど網の目が全体に行き渡って、これから１カ月たつと１２月１０日ごろが出荷というその今一番青年期になったそのメロンをずっと眺めるだけで、これで帰るのかなと思って振り返ったら、もうそこのテーブルにおいしいメロンがざあっと準備されておりまして、わき目もふらずいただいて、こちらに来ましたところ、その途中、浅羽海岸、サーファーがたくさんいるというところでございまして、ちょっと見に行きましたところ、この間の台風でもちょっと高潮が越えた、津波が来たらどうするかという心配があると聞いておりましたので、それを原田市長さんに案内していただきまして、そしてそれの対応などにつきまして、県内部で相談しながら、こちらに参って、腹が減ったなと思ったら、どんどこあさばの名品がざっと並んでいて、ここに着いたのが１２時半を回っていたものですから、弁当開けるやいなや、あっという間に、どこに入ったかわからないくらい。私はいつもは５分か１０分でアンパン二つなんですけれども、きょうはどんとこあさばのおいしい地場産品の料理を堪能して、今こちらにおります。

きょうは３時半まで長い時間でございますけれども、それぞれ袋井市、そして磐田市のリーダーの方たち、もちろんたくさんいらっしゃるんでしょうけれども、時間の関係で３人ずつ来ていただきまして、たまたま３人の女性、３人の男性ということで、それぞれ仕事も違うということで、そのお話を承りながら、これをしっかり受けとめまして、広聴の方ですから、しっかり聴く方でございますので、これを県政に生かしてまいりたいというふうに思っております。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

＜発言者１＞

改めまして、皆さん、こんにちは。よろしくお願いします。

それこそ先ほどおいしいお弁当をお昼に食べてきて、最後に食べたメロンシャーベットがそろそろ汗になって出てきて、こんなマイクをなかなか持つことはないものですから、ちょっと汗で滑りながら話をすることになると思います。よろしくお願いします。

私なんですけれども、生まれも育ちも磐田でございます。年は今３０歳ですので、孔子は「３０にして立つ」と言っておりますけれども、自立するということだと思いますけれども、まだようやく自立したかどうかというところの年齢でございます。

仕事としては磐田市の体育協会というところで働いております。僕は実は仕事とプライベートの境が最近は完全になくなってきてしまっているんですけれども、仕事の方では体育協会ですので、スポーツを通じて磐田市を元気にという活動をさせていただいています。そしてきょうは紹介をいただいたこの代表ということで出てきているんですが、若者いわたネットワークという団体、この名前をつけたのは、実はここにいる発言者２の方で、略してＷＩＮという名前をつけているんですけれども、その代表をさせていただいています。そのボランティアの団体では、若い力で磐田市を元気にということで、どちらも、仕事でもプライベートでも、とにかくまちが元気になるような活動をしたいなということで、毎日過ごさせていただいています。

体育協会の方では、今本当に今週末に行われるジュビロ磐田メモリアルマラソンというのがあるわけで、これを何かまちおこしの起爆剤にしたいなと、仕事を始めた当初から思っていたものですから、特にマラソン大会というのは、今全国的にまちおこしのイベントの大きな目玉としてやられていて、東京マラソンだとか、大阪マラソンというのは、もう皆さんも聞いていると思いますが、世界的に見てもホノルルマラソンとか、シカゴマラソンとか、ボストンマラソン、いろんなところでマラソン大会をやってまちおこしをしています。

今回ジュビロマラソンは昨年まで５０００名ほどの参加者だったのが、７５００人ほどの参加者になりまして、とても大きな人数を磐田に迎えてやるのはいいんですが、何より大事なのは、僕はそれを支えるボランティア活動をする皆さんだと思っていまして、これも昨年まで８００名ぐらいのボランティアでやっていたんですが、２２００人ぐらいの今回はボランティアでやることになっています。

そしてそのボランティアの多くが割と年配の皆さんで、６０歳から７０歳ぐらいまでの皆さんと一緒に毎晩知恵を出し合いながら企画を進めております。私自身はボランティア

の皆さんが毎日うまく働けるように、作業ができるように段取りをするというような影の役割ですけれども、そんな仕事をさせていただいています。

ほかにも仕事では再来週に、実は磐田の新東名の道路に、ちょうど入れるところがあるものですから、新東名ウォーキング大会を５００名ぐらいの規模で開催したり、その次の週には市町対抗駅伝、県の駅伝大会があるので、その事務局もやらせていただいているということで、毎日スポーツに携わる仕事をさせていただいています。

そしてきょう呼ばれた若者いわたネットワークという団体では、先ほど言ったように若い力でとにかくまちを元気にしたいなと思っていますが、やっぱりこのきっかけになったのは、今体育協会で僕自身働かせていただいていて、元気な６０歳、７０歳の人たちに接していたものですから、何とか若い人たちもそんな元気な皆さんに影響を受けたり、学んだりという場が欲しいなというふうに前々から思っていたわけで、若い人たちと何かやりたいなというふうにも思っていたわけです。

昔、青年団という団体がそれぞれの市町にあったと思うんですけれども、磐田ではその青年団がなくなってしまって、その青年団が昔からやっていた「いわたゆきまつり」という長野県から雪を持ってきて子どもたちに遊んでもらうイベントですね、そのイベントを我々の団体で引き継がせていただいて、今はやらせてもらっています。

この団体に入れるのは、一応年齢制限を設けていまして、１８歳から３５歳までということにしていて、やはり若い人たちで、特に２０代を中心にひとつ大きなイベントをやりたいなということで活動しています。

最初数えるほどだったのが、今では８０名ほどで活動をしております。天竜川のごみ拾いをしたりとか、そんなことも今はやっています。とにかく個人的にはまちを元気にしたいという思いしかなくて、それがいろんなフィールドでそれぞれ活動されている皆さんがいるものですから、そういった方々のお手伝いをしたり、はたまた自分で発信したりというようなことが大事じゃないかなと。とにかく人と人とがつながって、知恵を出し合って汗をかく、そんなことがまちづくりには大事じゃないかなと思いますし、本当にそれを教えてくれているのは、今の職場を支えているボランティアの体育協会の皆さんで、本当にいい勉強をさせていただいています。

きょうはこういう場ですので、どんなことをこれから考えていかなきゃいけないかなということをお話しするとするならば、やっぱり僕は今２０代を出たところで３０代に入ったんですけれども、学校を２２歳で大学を出るとか、高校を１８歳で出てから、急に教え

てもらう場がなくなって、昔は職場や地域でいろんなことを教えてもらう場があったんですけれども、今はそういう場所がなくなっているものですから、そういう人が、特に２０代ぐらいの人たちが自分たちで学び合える場をこれから特につくっていかなきゃいけないのかなというふうにも思っているので、これからは若者いわたネットワークという団体の中で、そういう場所を若い人たちに提供していけたらいいなと、こんなふうに漠然と思っています。

＜発言者２＞

ＮＰＯ法人の代表をさせていただいております。よろしくお願いいたします。人前でしゃべるのがとても苦手で、今胸がどきどきしている状態なんですけれども、ちょっと聞いてください。

私の仕事はサーフショップです。趣味も仕事もサーフィンという形で、毎朝子どもを送り出してから海でサーフィンをしてからお店に行くという生活をしています。そのときに海岸にしろ、海の中にしろ、台風の後とかにはすごくごみが落ちていて、何でこんなごみの中で私たちはサーフィンをしなきゃいけないんだろうと思ったことがきっかけで、ごみ拾いをする活動を始めました。それを毎年続けて、今では１５年ぐらいになるんですけれども、その活動を毎月第一日曜日の朝９時から行っています。それをしているのがきっかけでいろんな人と出会い、いろんなことを思うようになって、２００７年４月にＮＰＯ法人というものを知り、設立することになりました。

法人を立てるまでに１年ぐらいの時間がかかりました。サーフィンのイメージをよくしたいとか、いろんな活動ができたらいいなと思っていて、どうすればいいんだろうと考えたときに、ある方がＮＰＯ法人というのを取ったらどうだといって勧めてくれました。それまでほとんど勉強したことがなかった私なんですけれども、そのときだけはしっかり勉強させていただきまして、法人化にたどり着くことができました。

一番の目的は「海と人を結びつける」という言葉を合い言葉に活動しています。サーフィンというとイメージが余りよくないんですけれども、中にはいいことをしたり、本当に心のこもった人たちがたくさんいます。同じ波には二度と乗れません。そしてフィールドの中で一緒にやっているメンバーも、下は小学校１年生ぐらいの子から６０代、７０代の方たちと一緒に切磋琢磨して毎日毎日サーフィンしています。そんな大事な大事な海をどうにかどうにか未来につなげていけたらなと思って活動しています。

ＮＰＯを取ってから、私たちの活動には三つの柱があります。一番に海を守る活動、これはずっと根本的にあるビーチクリーンです。毎月第一日曜日、欠かさずやっています。それでそこに最近は水質検査を始めました。２番目に親しむ活動として、磐田市長杯ラインナップカップというサーフィンコンテストをさせてもらっています。ことし９回目の開催になりました。なかなか続けていくのは大変なんですけれども、来年１０回目に向けて頑張っていこうと思っています。

そして親しんでもらうということで、「海で遊ぼう親子ふれあいビーチ」と題しまして、海での遊び方教室、ビーチサッカー、サーフィン教室、レスキュー体験などをさせてもらっています。いきなり来て、海で遊んでいいよというのはなかなか難しいし、危ないので、ちゃんとした教えてあげられる環境をつくってあげれば、海はとっても身近なものだと思うので、そちらの方も力を入れて活動しています。

そして伝える活動として、海を身近にしたいということで、今之浦公園というところで環境イベントの「エコノワ」というものを実施させてもらっています。ことしも１１月２０日に今之浦公園でやりますので、フリーマーケットとか、いろいろな活動団体のＰＲブースもありますので、ぜひお時間のある方は来てください。

それとともに伝える大事なこととして、環境と社会貢献をキーワードに、人・企業・地域をつなぐフリーペーパー「エコノワ」というのを年に１回発行しています。こちらはなかなか普通のところに置いてないんですけれども、申し込みがあれば郵送させてもらっています。地域の底に埋まっているような情報を取り上げて、いろんなところに伝えていって、身近な輪っかができていって、地域が活性化していったらいいなと思って発行しています。

私たちの活動拠点というのは、福田漁港の横にある豊浜海岸というところなんですけれども、そこには年間７万人以上のサーファーが来ています。福田漁港の中でも釣りをする方や、散歩の方や、いろんな方がお休みの間は来てくれます。ですが、なかなかその後の整備というものが進んでいませんので、来てもそのまま帰ってしまうというすごくもったいないなと思っています。現在は交流広場というのが工事されています。そこができるようになれば、ビーチサッカーやビーチバレーなど、マリンスポーツが盛んな場所になるんじゃないかなと思っています。

なので、サーフィンもそうなんですけれども、マリンスポーツというキーワードにまちづくりができて、人が集まって、そこに産業が生まれて、地域の一番大事な活性化になる

ような活動をしていきたいなと思っています。大事な大事な海なので、これからも大切に守っていきたいなと思っています。

＜発言者１、発言者２に対する知事のコメント＞

今、磐田を代表するお二人、お若い青年のお話に大変元気づけられました。やっぱり磐田はスポーツなんですね。そしてお二人、発言者１さんは陸を中心にしたマラソンとかウォーキングとか、そして発言者２さんの方は海ということで、その両方合わせると、もう本当に調和のとれた、スポーツを軸にした元気になるような、そういう活動をされているということで、私今、発言者１さんのお話を聞いていて、「３０にして立つ」というふうにおっしゃって、そして学校を出た後教えてもらう人がいなくなっていると。

３５歳までは若者いわたネットワークですか、それぞれの頭文字をとってW、磐田のＩ、そしてネットワークのＮでＷＩＮという勝つという意味ですから、なかなかいいんじゃないかと思いますけれども、そういう３５歳未満の人たちが一緒になってやっている活動、それは学校を出て、そこの中に入ると３０歳前後の人たちがいて、先輩がいて教えてくれる。この関係が大事だと思われているんだけれども、そして学ぶことの大切さを言われましたけれども、あなたは体育協会の役員でしょう。（「そうです」）偉いんですよ。ですがそういう権威を傘にするというところが皆無で、そこがこのネットワークがうまくいっている理由の一つかなと思いますね。

先ほどのマラソンでも５０００人の参加者が７５００人になった。１．５倍ですね。ところがボランティアの方は８００人が２２００人になったというんですから、３倍弱ということ。ですからこの活動はものすごい勢いを持って今始まっているということをこの数字からでもわかると思います。

そして発言者２さんは海で育って、サーフィンが好きでやっていて、汚れているのは、これは海に対して失礼だというところでごみ拾いをやっていくうちに、これを組織的に第一日曜日の午前９時から、しかもそれをＮＰＯとして立ち上げるために勉強をするということで、今度は自分の知っている海を人に伝えるために、まず海に親しむにはどうしたらいいか。例えばスポーツ、ビーチサッカーとかビーチバレーですか、こうしたことに子供たちを親しませて、そこで遊ぶとか、しかしそれだけじゃだめなので、伝えるという。編集されている「エコノワ」というのはリングの輪だけじゃなくて、同時にエコ、今のエコの運動ですね、地球のエコ、環境を大事にしましょうというそういう雑誌のタイトルもい

いですし、それを伝えるための立派な雑誌も発行されていて、私はこういう形で若い青年が、それよりもさらに年をいかない人たちに、お父さんやお母さん、学校の先生のかわりになって、自然というもの、あるいは彼らが先生になり、自然が先生になり、かつ自分たちがかつて先輩に学んだように、若い人たちに教えていくという、これが地域が地域の人たちを育てるという基本だと思います。

６０代、７０代の方も大事、サーフィンの場合には小学生１年生から６０代、７０代の方がなさっておられるということですが、そういう人たちが一緒になって、一緒に地域の人たちが、いわばたくましくなっていくというそういう核になる３０代になったばかりの人、３０歳を大きく回られたに違いありません、姿は２０代に見えますけれども。しかし「３０にして立つ」「４０にして惑わず」、４０、迷うんですね。だから惑わずと。

「５０は天命を知る」、もうあきらめなさいということですから、余り振り返ってもしようがない、こういう人生、どんなに人々は違っても、それぞれ神様から与えられている人間の寿命というのは８０歳、９０歳ぐらいまでで尽きてしまうので、その間、しかしそれぞれの役割があるはずなので、その地域力をしっかりそれぞれの今の自分ができることに応じてやっていこうと。これをスポーツというところにお二人は期せずして共通のものが浮かび上がってまいりまして、特に磐田はそういうジュビロだけではなくて、こういう人材がいるということが大事で、私はこのお二人の活躍をさらに大きな輪として広げていただくことを強く望みますし、注目してまいりたいと思います。ありがとうございました。

＜発言者３＞

私は袋井市で助産院を開業しております。私が開業しております助産院は、自宅出産を取り扱っております。さっきも自然という言葉がありましたけれども、お産は本来は自然なことでして、ですが今ほとんど９９％くらいの勢いで、ほとんどの方は病院という施設でお産されていて、数％になるかなというぐらいの方が助産院でのお産だと思います。そしてそのさらに数％がこの自宅出産を選ばれてお産をするという、もう本当に小さな小さな助産院です。

私がこの自宅出産をしようと思ったのはなぜかと言いますと、お産て、どうしたら安産になるのかなと、健康に自然にできるのかなというふうに、一番は産む女性が本当にリラックスした状態、この状態がキープできれば本当に安産になるんです。で、例えば皆さんがちょっと素敵な旅館に行きました。とても素敵で居心地いいけど、でもやっぱりおうち

に帰ってきてほっとされませんか。それと一緒で、どんなに医療施設が整った病院であっても、どこかちょっと緊張している。やはり自分の家、家族に囲まれているというときが本当に心が安らぐ環境、そういう環境の中で、やはりお産も迎えられるとすごくいいなと思っています。

で、お産をする人がリラックスできるということは、その周りにいる者が、そのお産する人、そしてお腹の中の赤ちゃんに対して、本当に愛情ある温かい気持ちでそばにいるということが大事なのかなと思っています。私はそういうお産がすごく好きなので、この自宅出産というお産をお手伝いしようと思って助産院を開業しました。

皆さんも御存じのとおり、袋井市はお産をする施設がうちしかありません。うちだけなんです。でも本当に私実は２歳と４歳の小さな子どもを育てている母でもありまして、そんなたくさんのお産をできませんし、本当に月に１件、２件という程度の妊婦さんたちとゆっくりかかわってお産をしています。

そういうふうなお産の仕方をしていて、一番やっていて困るなというふうに感じたことが何点かあって、ちょっときょうその話をしたいと思います。

一つは、知事がマニフェストにも医療体制を整えていくというふうに挙げているんですけれども、県立こども病院、静岡市にある大きな病院と、あと聖隷病院なんですね、受け入れ先が。そうすると、この辺の地域は何かあったときというのは、聖隷まで行くと、ドクターヘリで行ったり、本当に大変な思いをして、皆さん出産のときに行く。うちのような小さな助産院の場合、まず近くの総合病院さんにかかるんですけど、総合病院さんも、磐田病院さんも、年間件数を減らしていますし、今度菊川病院もお産をやめるということで、掛川病院もものすごい大変な状態で、そういう本当にお医者さんたちも苛酷な労働条件の中で働いていますので、お産て２４時間、いつ、夜間かもしれないしというところで起こったときに、掛川病院でも対応し切れないで、聖隷へということもありますし、掛川の先生からも、そういう緊急時のときは、うちに連絡しないでくださいというふうなこととかも言われまして、本当に私は自宅出産とか、助産院とか、病院とか、施設はどこでもいいのかもしれないけど、安心して産むというには、やっぱり医療体制が本当にきちっと整っているということが大事なのかなと思いまして、ちょっとこの辺の地域からだと聖隷とかこども病院というのは遠過ぎるというのがあります。

というのは帝王切開するという判断になってから、本来は１５分以内に帝王切開ができるのが一番ベストという言い方をされています。でもここから聖隷へは１時間かかります。

そういうことを考えると、本当にもう少しこの地域の近くにそういう一次救急の病院なりできるといいのかなと思います。

もう一つは、私はお産をする場合に、私一人がお産のときにいるわけじゃなくて、もう一人サポートの助産師が必要になるんですけれども、そのサポートしてもらう助産師を探すのがものすごく大変だったので、そういう意味でも、知事のマニュフェストに女医の子育てをしながら勤務ができる環境を整えるとか、いろいろ挙げているんです、お医者さんのことは。でももう少し看護師とか助産師に対しても、そういうのがあるといいかなというふうに感じています。

あと助産師の活動とは少し外れていくんですが、ラブバースという助産師８人でユニットをつくってまして、「命の教育」というのを子どもたちに向けて活動しています。この活動をした背景には、私が東京に以前住んでいるときに、虐待を扱うケースのこととかをいろいろ学んだことから、やっぱり命の大切さを子供たちがきちっと持つということが大事なのかなと思って、それを伝えたいと思って始めていたんですけれども、それをやっているうちに、袋井市はすごく子育て世代に人気のある市なんです。

私の周りも、そろそろ子供ができて、アパート住まいからおうちを建てたいということで、袋井で探す人たちがたくさんいて、実際に出生率もすごく高いですし、そういう若い定住者も多い袋井なんですけれども、それと同時にやはり孤立していて、おじいちゃん、おばあちゃんと住んでいないので、孤立している方たちもすごく増えていて、でもそうはいっても袋井市はすごく市長さんが頑張って、そういう子育て環境を整えてくれているので恵まれてはいるんですが、そういうこととかあるので、その辺も今後静岡県としてどういうふうに方向性として向かっていくのかなというのを知事さんにお聞きしたいなと思っておりました。

＜発言者４＞

私は磐田駅前にある天平のまちの３階で子育て支援総合センター、支援センターの拠点になるところなんですけど、そこで働かせていただいております。

昨年の３月までは、私は保育園の方に勤務しておりました。この浅羽の町の隣の東新町、つまり県営団地のそばにある保育園で、そこにブラジル人の子供たちがたくさんいまして、その子どもたちをたくさん受け入れて、また学童保育も行いながら、外国の子どもたち、ブラジル人ばっかりでしたけれども、たくさん接してきました。

その中でちょっと感じたことを話させていただきたいと思います。やはり保育園で乳幼児期から過ごして、日本の文化、そして日本語を学んだ子どもたちが小学校に行ったときはとてもスムーズなんですけど、ブラジル人の保育園からそのまま小学校に入学すると、とても戸惑って、学童保育へ来ても、私たちが勉強を教えるのもかなり困難だといういろんな苦労がありました。

その中で私はやはり外国の子どもも多文化共生を目指していくならば、日本の子も外国の子も共に過ごすのが大事ではないかなということを感じながら、昨年の３月に定年退職を迎えまして、そして今現在の支援センターで勤務して、やはり保育園を利用する親たちと支援センターを利用する親たちの思いの違いというものを今とても痛感しております。

ちなみに磐田市は子育て支援に対するシステムというか、行政の頑張りはすごいなというのを私はまだ１年半しか子育て支援センターでは関わっておりませんけれども、とても充実しているなということは感じております。集いの広場を含めまして、約１１カ所あるんですけれども、月１回そこで情報を共有化しながら、気になる家庭、気になる親、気になる子どもたちのことの情報をいろいろ話し合いながら、専門機関へつなげていったり、虐待の予防にもつなげていける方法を見出しながら、感動社会を支援課の主催のもとでやっております。

そんな中で、あっそういう部分ではすばらしいな、でも私たちに与えられた本来の課題は、やはりそういうハード的なものではない、ソフト面で私たちは頑張っていかなければいけないんではないかな、ということを今うちの「のびのび」で働きながら、とても痛感しております。なぜかというと、駅前にあるせいか、いろんな地方から転勤族が来るんですね。その転勤族の方たちは、子育てをしながら、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃんに子育ての相談をすることもできない、お友達もいないということで、とても育児不安を抱えて来館する率がとても高いセンターなんです。

で、そんな表情を見たときに、私たちはどのようにそういう方たちと接していかなければいけないのかということが、私たちの課題になってくるんです。で、いろいろ昨年の秋ぐらいから考えまして、この育児不安を抱えているお母さんたちと、ともかく仲良くなること、それと信頼関係を結ばなければいけないということを、いろいろ職員間で話し合いまして、月１回「おはなし劇場」と称しまして、私たちが日ごろの顔を隠すというか、いろんな動物になったり、おじいちゃん、おばあちゃんに変身したりとかということで、劇をやるんですね。

子ども向けの劇というよりも、母親が楽しめるような劇を催して、そしてお母さんたちと、そして私たちと一緒に笑いながら、きょうは先生こうだったよ、ああだったよという話をしながら、もうリフレッシュできましたと言って帰っていく姿を見たときに、次の日にそれがつながっていくんですね。「先生、来月は何やる？」とか、また「毎日ここへ来させて、すごく相談しやすい」とかという、そういう関係がとても今生まれてきているなというのを感じております。

ですので、今までちらほら苦情等があって、投書箱等にちょっと一言とか、いろいろうちの支援センターのことに対する要望等もありましたが、本当にことしになって、ほとんどそういう苦情等もなくなって、とても利用者と職員の関係がうまく運んでいるなというのを感じている現在です。

やっぱり先ほども申しましたように、私たちは本当に行政は箱物をしっかりつくってくれる。その中で私たち一人一人スタッフがどのように資質を向上し、そういう利用者と上手に交わって関わっていくことが大事かという、つまりファーストコンタクトがいかに大事かを課題に、今後も職員みんなで力を合わせて頑張って努力していきたいなというふうに思います。

うちのセンターは今移転の話もございますので、これからはますます複合的な事業、ファミリーサポートとか、一時保育事業とか、病児保育とか、いろんなことを交えながら、磐田のまちがよりよく発展して、そして子育ての不安を抱える人たちが一人でも減っていくようなまちを目指して努力していきたいと思っております。

＜発言者３、発言者４に対する知事のコメント＞

先ほどのスポーツの話からがらっと変わりまして、お産とそれから子育てという、これもまた一つの統一した点のお話が続いたように思いますが、発言者３さんは袋井ということですが、もうここは産んでよし、育ててよしというイメージではトップクラスなわけです。

実際それが数字にあらわれておりまして、合計特殊出生率という数字があります。これは女性の方々が一生に何人子供を産むかという全国都市別、あるいは県別、日本全体の平均、日本全体では１．３９余りなんです。静岡県全体では１．４人ぐらいなんです。ところが袋井は１．６台です。しかしおっしゃるように問題を抱えていると。

袋井市長さんなどは、実はそういうお産をする病院がなくて、あるいはお医者さんがい

なくて、本当に困って、磐田にお世話になっているとおっしゃっている。しかし磐田よりも出生率は高いんですね。磐田は１．４台の後半です。平均より高いんです、静岡県の。その磐田よりも実はこちらの方が恵まれている。

私先ほど食事のときに聞いたら、発言者３さん御自身は広島県のお生まれだそうです。こちらに嫁いでこられて、そしてお母様からお茶の入れ方を教わったと。それは本当に煎茶をおいしくいただく、静岡県の人にとっては日常の知らぬうちに身につけた、おいしいお茶をおいしくいただく作法なわけですが、外から来た者にとってはそれは驚愕なわけです。

お茶を見るのが最初は恐かったと。しかしおいしいお茶をいただいて、そしてその中でおばちゃんからいろんなお話を聞く、そしてそれが自分ができることなら、本当にいいほっとした、くつろいだ、一番安心したところでお産ができるのがいいということで自宅お産と。自宅でお産をするということを自分が手伝ってみようということでやってらっしゃるということで、本当にありがたいことだと。いろんな機械であるとか、そういう高度な医療にのみ頼る中で、一番心の中で一番高度な優しい気持ちで、そこで安心してお産ができるという、そういうことをしていきたいとおっしゃっているので、こうしたことが私は合計特殊出生率が県の中でもトップクラスの数字になっているのではないかと感じました。

ただし、実は、今１．６であると言いましたけど、２．０ぐらいにまでならないと人口は減っていくんです。昨年のいわゆる国勢調査で昨年度の人口として３７７万と出たわけです。ところが実は今３７５万２０００台かな。もう本当に富士山を滑り落ちるように減ってきているわけです。ですからこのお産のことは本当に重要で、やはり人口が減っていきますと活力が削がれていきますので、何としてでもこれはと止めなくちゃいけない。そのためには発言者３さんのような人をサポートしなくちゃいけない。この活動が広まらなくちゃいけない。

ただし、やっぱり自宅のお産はそれなりの限界がありますから、やはりいざというときには病院のお世話になるということもできないといけないということで、マニフェストまでお読みいただいて、実行してないじゃないかと言われるんですが、本当に厳しい御批判をいただいて、県会議員からもこれほど厳しい御指摘はなかなかいただけないんですが。そんなわけで女の人が少ないんですね。もっと女の人が県会議員になったらどうでしょうか。

そういうふうなことも考えますけれども、実はもっと厳しいところがあります。そんな

ことで、上を見たらきりがないし、下を見てもきりがないというそうした中で、静岡県は全国平均として見ても実はお医者様が少ない。そしてお産に携わってくださる方も少ない。そして助産師も少ないというようなことになっておりまして、それだけにそういう専門だけではなくて、今まで伝統で培った技術もありますので、こういう伝統的なものに立脚した形で、本来お産が母になる、その人の一番愛している人たちに囲まれてお子様が生まれてくるという環境づくりは、これは育てていきたいと、応援してまいりたいというふうに強く思った次第です。

ただ御指摘の医療政策の確立なり拡充というところは、十分にすぐに対応できてなくて、申しわけありませんが、これは私は一番大事なことだと思っておりますので、それをこちらにいらっしゃる先生方と御協力をしながら、安心して子育てができるような環境の医療環境を充実してまいりたいということをお約束いたします。

それから発言者４さんは、実は発言者１さんが、誰に保育園のとき教わったのかというと、発言者４さんなんです。恩師なんです。教え子だとおっしゃった。発言者１さんは３０歳だそうですが、保育園のときは５つぐらいですか。そんなもんです。２５年間忘れないんですね。小さいときも覚えているということで、それが２５年ぶりの今回再会になったという。ちゃんと「ああ、いい子でした」とさっと言われました。だから発言者４先生に教わった保育園の子は、みんなこういうふうになるんじゃないかと思いますが、しかしその保育園も今時期が来て、今度は子育て支援の活動をなさられた。そうすると全く違うということにお気づきになったと。やはり転勤族が多い。

そこで、僕は大事なことを言われたと思うんですけど、おじいさん、おばあさんと一緒に暮らしていないので、お母様方がいろいろと小さなことについても問題を抱えてこられていると。逆に言うと、発言者４さんのところはおばあちゃんがいらして、いろいろお茶の入れ方も教わった。これは要するに家族の絆が、おじいちゃん、おばあちゃんの世代、それからお父さん、お母さん世代、子どもの世代と、こういうのが育っている社会だということですね。そういうものが断たれていると、いろんな経験を学ぶことができないので、どうしてもこういう子育て支援センターというようなベテランの方にサポートしていただかなくてはならない。

これはやっぱり自分の義理のおじいさんやおばあさんがいなくても、子育てを経験したことのある、あるいはお母さんＯＧといいますか、お母さん経験者、この方たちが実は現役のお母さん方にとって、その子育ての助言であるとか、あるいはいろんな経験を語って

聞かせて差し上げるというそういう役割を担えるということじゃないかと思います。

そして私は、悩みを聞くのに「おはなし劇場」という別の人間に、あるいは別の動物に扮して自分の思いを語ってみるというのは、直接自分が言わなくていいので、すごく言いやすいですね。そういうふうにして問題を出して聞いてくださる人がいると、今度はそれの解決策も聞くことができるというそういうすばらしい試みをされている。

もう一つはやはり外国人。やっぱり外国の保育園から普通の小学校に来ると問題がある。しかし子どもには全く責任がありません。ですからお父さん、お母さん方は仕事の都合でこちらに来られたりして、しかし子どもは全くそういうこととは関係なしに育っていくので、この子どもたちをどのようにして社会の中に溶け込ませるかというときに、いろいろ工夫されているみたい。

ただ、こういう磐田とか浜松というところは、日本中で最も注目されているところです。ちなみに皇后陛下が下田の須崎の御用邸に来られましたときに、県の事情を御説明するために参ったんですが、そのときに皇后陛下から、また天皇陛下からも、「ブラジルの子どもたちは大丈夫？」と言われまして、本当に心配されているということがわかっておりました。

それは日本人が一番たくさん行った外国はどこかというとブラジルです。３０万人ぐらい行きました。それがだんだん増えて、今百数十万人になっています。そのときは子どもも行っているんですね。その子どもたちが立派になって、ブラジルの社会では尊敬されるような仕事をされていると。同じように逆の立場なので、仕事を、あるいは学校、教育、しつけ、こうしたものを日本人として助けて差し上げたいと思っているということでございました。そしてまた自分の子ども、すなわち皇太子殿下、秋篠宮様、そして降嫁されました清子様ですね。皆最初の公式外遊はブラジルだったそうです。

だからブラジルの人たちがこちらにいるということは、いかに我々がそれを大事にしなくちゃいけないかということでもありますので、私は今おっしゃったおじいちゃん、おばあちゃんの世代の方々を活用すると同時に、そういう子どもたちを日本の社会の中に上手に楽しく、しかも希望を持って、いじめられないですむような、そういう学校生活ができるために、発言者４さんが活動されているのは、小さな子どもたちの育て方のベテランであるだけに本当に大事だと感じました。

小学校なんかでも、発言者４さんのような方の意見を入れながら、そのいわゆる多文化共生というふうに言葉では言いますけれども、子どもたちは外国人であろうと日本人であ

ろうと同じように元気に育つようにしていく、そういう我々はプロフェッショナルにならなければいけないし、そういう条件をこの地域は備えているということなので、この点でも、私は今すぐ何ができるというふうに答えられないのはちょっと残念ですけれども、現場に即してできる限りのサポートを我々の方としてもしてまいりたいというふうに思っております。

磐田の方は、今出生率がそれほど立派と言われるほどじゃないので、その理由もお聞きしてわかったと。おじいさん、おばあさんの役割が大事だということで、これはもうやっぱり地域の子どもたちは地域の大人が全員のいろんな経験が共有されるような形で、子どもたちが元気に育っていくという、そこがこのお二人の話に共通するところではないかというふうに感じた次第です。

＜発言者５＞

私はデンマーク牧場というところにいるんですけれども、実はここから車で５～６分のところじゃないかなと思います。袋井市の笠原という地域におりまして、今いらっしゃる皆さんの中では一番近いんじゃないか、その一人じゃないかなというふうに思っています。

私デンマーク牧場に来て２７年ぐらいになります。１５万坪、約５０万平米という大きな広大な自然の中で牧場を営みながら、そして子どもたちと一緒に働きながら、フリースクールをずっとやってきました。で、そんな中で十数年前から児童虐待という問題が非常に深刻になってきまして、そして社会福祉法人を取得して、虐待を受けた子どもたちを受け入れる場、そういう施設である児童養護施設をつくりました。まきばの家という施設です。

現在２歳から１８歳までの子どもたちが３０名生活をしています。そして地域の幼稚園や小学校、中学校、そして高校ということで、地域の子どもたちと一緒に学校にも通い、一緒に学んでいます。もう一つは自立援助ホームこどもの家という、これはフリースクールこどもの家から発展してきたという形ですけれども、義務教育修了の子どもたちが２０歳まで入れる施設でして、６名の小さなホームなんですけれども、それでもほかの施設でうまくいかなかった子どもたちが入居しています。

そんな活動をしている中で、きょうはぜひ皆さんにも、知事にも、ぜひ児童虐待の最前線と言われるこの養護施設の実態を知っていただいて、そして理解いただいて、今後の政策につなげていただきたいというふうに切に切に思っています。

現在まきばの家で生活している子どもたち、あるいは全国５８０カ所あるという児童養護施設の中で、子どもたちが本当にいろいろな問題を起こしています。当たり前の話なんです。親に、本当に一番愛情をかけられなきゃならない親から虐待を受けた子どもたちですので、いろんな問題を起こし、「こんな私でも許してくれますか。」「こんな私でも生きていいんですか。」という訴え、体を張った訴えに、私たち大人は本当に体を張って受けとめていかなければならない。生きていていいのか。おまえたち大人に追い詰められたという根源的な思いに対して、私たち大人は本当になすすべもなく、ただただそばにいるだけということが多いんですけれども、それでも何とか前を向いて生きていこう、一緒に生きていこうという生活を毎日毎日続けています。大丈夫だよ、安心していいよ、大変だけれども一緒に生きていこうというメッセージを送り続けていくという仕事だろうと思います。

ただ、傷が深いだけに、致命傷と思われるぐらいの傷なだけに、そうそう簡単に癒えるわけでもなく、時間もかかります。大人になっても癒えないという方がたくさんいらっしゃいます。で、もっと深刻なことは、そういう大事にされないで育ってきた子ども、虐待を受け育ってきた子どもというのは、またやがて大人になったときに、また子どもたちの育て方がわからなくて、虐待に走っていくというこの負の連鎖ということがよく言われています。私たちの仕事はこの負の連鎖を断ち切る。断ち切って新しい生き方を共に歩んでいく、そんな生活を提供することが責務だというふうに思っています。

そんな中で実際には職員の数が圧倒的に足りませんし、研修も必要ですし、いろんな技術も身につけなければなりません。そういうことが本当に遅々として進まずに、職員が疲弊し、そしてもう観念しようということで若い職員たちが退職していく、そういう現実を目の当たりに見ています。ぜひこれを大きな施策、我々自身も努力するんですけれども、ぜひ力を貸していただきたい。そして希望の持てる子どもたち、希望の持てる社会に入りたい、そんなふうに切に思います。

そしてたまたま笠原地区というのはお茶の産地です。この子どもたちが行き帰り、登下校のときに本当に地域の農家の方たち、お茶の仕事をしている方たちに「いってらっしゃい」「おかえり」「元気か」という声、そういう言葉がけが子どもたちはほっとするんですね。何気ない、そして普段の大人たちがしっかり仕事をし、そして自分たちに声をかけてくれる、これがほっとする。ああよかったな、生きていていいんだというふうにつながっていく。いろんな大人たちがいるんだよということ、そして特に地域の方たちに声をかけていただいたり、そして悪いことをすればきちんと叱っていただく、こういう形でいろん

なさまざまな事情を持った子どもたちですけれども、地域の中で育っていく。施設の職員だけでは育て切れません。地域の人たちや学校の先生に育てていってもらうというのが我々の実感としてわかります。

と同時に、今後は私たちが持っているノウハウ、いろんな大変なお子さんたち、そして親御さんも、また助けを必要としている親御さんたち、そういうお話を聞く中で、子育てについてのノウハウや、いろんな情報、これを地域でまたお困りになっている、あるいは悩んでいらっしゃる方たちに提供したいというふうにも思っています。我々が、施設というのは地域あっての施設と言われるんですけれども、逆に施設あっての地域と言われるぐらい、我々も力をつけて地域に還元していけたらなというふうに思っています。

地域の力、地域の皆さんの支えがこの虐待の問題というのは特に必要だというふうに思っています。そういう面で、恵まれた地域で恵まれた人たちに囲まれているこの場所で、そして自然の中でいろんな恵みを感じながら、虐待に遭った子どもたち、家族と一緒に暮らせないという非常に辛い思いをしている子どもたちと一緒に生きていきたい。そのためにぜひ力を貸していただきたいというふうに思います。

＜発言者６＞

私は袋井市の一番南の集落、西同笠に工場を構えて、ガス器具だとか自動車部品をつくっています。それで住まいももちろん西同笠ですけれども、最近の３月の大震災のテレビ画像、そういうものを見た後に、果たしてこのままでいいんだろうかというような思いをしておりました。

今まで５人の方々の話を聞きますと、みんな人との接触、そういったもので大変御苦労なさっている。だけども、私はちょっとエゴみたいな形なんだけれども、自分の会社を守るみたいな形にどうもなってしまいそうだな。ちょっと恥ずかしい話ですけれども、そんな形に、人のためになるのかというようなことをちょっとお話をしてみたいと思います。

私は東京から昭和４８年に工場移転として西同笠の海岸に来ました。まさにそのときは西同笠の海岸は白砂青松の松林がものすごくたくさんありまして、海岸は約２００ｍくらい向こうまで白い砂で覆われていたすばらしい海岸だったということです。ところが最近１０年くらい前から極端に、毎年毎年約１５ｍくらい平均して海岸浸食が始まっています。地域の長老に聞きますと、あそこの海岸の堤防を越えたのは伊勢湾台風以来だと。伊勢湾台風が越えた以後、一度も越えたことがない、そういうような話を聞いて安心して工場経

営に携わってきたわけです。

しかし先ほど言ったように１５ｍくらい毎年毎年削られてきた。それが端的に出たのが今から１０年くらい前、福田漁港の突堤が約１０００ｍ沖まで出て、潮の流れをどうやら変えてしまったようだなというようなことで、その当時、浅羽町の時代ですけれども、未来塾として集まりがありまして、そこで一番突端の方から瓶を流してみようということで、何本か瓶を流したら、やはり西同笠の海岸に３本か４本流れていき、完全に渦を巻いたような形で、沖を流れるべきものが、ずっと回って、西同笠から港の方まで行く、そういった形で渦を巻いているというようなことがはっきりしたわけです。これは自然の営みを突堤という形で崩してしまったということです。いろんなものを見ますと、いつも自然の営みを壊して環境破壊をしているのは、やはり人間なんだなというようなことを思っているわけです。

今から６年くらい前の台風で、私どもの会社のすぐ前に初めて波がかぶって、作業場の中まで入ったというのが６年前、それから３年前ぐらいに太郎助の自転車道の部分が完全に削られてしまいまして、今はもちろん堤防を築いて、また直してはいただいてありますが、ことしの台風１５号でまた同じところからちょっと西が同じように削られました。当然のこと、西同笠の海岸は、その１５号でもまたその堤防を乗り越えてしまったというようなことがあります。

先ほど一番当初に私が言った台風じゃなくて地震の津波で５０年、１００年、もしかしたら１０００年に１回とかの津波かもしれない。そういう前提で考えてみると、もう最近ではそんな１００年だ、５００年だ、１０００年じゃなくて、毎年のように台風ぐらいで越水をしてしまうというようなことで、さあ、これから工場移転でもしなければいけないのかなというような考えを持っているわけです。

浅羽町の企業交流会というのがありまして、この海岸に存在する企業さんが８社あるんですけれども、やはり同じような考え方をしています。掛川の方へ行かなきゃいけないのか、とにかく高台の方に逃げなければしょうがないな。一番問題なのは、前の方の堤防は平均して１２ｍくらいありますので、９ｍやそこらの津波だとびくともしないという考えでおります。

残念なことに４～５カ所、自動車が第２砂防の方まで行く、そのための通路がどうしても切り通しという形で、越水した場合は完全にそこから流れて砂を流してしまう、そういうことが考えられるなということです。何とかそういうようなものをほとんど費用もかか

らない、丈夫ですから、埋め戻しをしていただきたいなという考えを持っておりますが、今の第２砂防が８．５ｍ、砂防の一番高いところ辺りで１２ｍから１３ｍで、ずっと３００ｍつながっているんですけれども、４カ所、切り通しがある。そこだけまず塞げば、あとは波が来ても、掛川との境の弁財天川、この堤防が大体４．５ｍですから、当然７ｍばかりの波が来れば決壊してしまう。それでまた福田漁港の方も大して高くない。ですからあそこから、Ｂ工業さんのあたり、私よく冗談に言うんだけど、おたく一番元とったねというような話も、皆さんとよく仲間内で話をしているわけですけれども、ちょっとそういうような心配がここのところあります。

そういったものを私ども袋井市の浅羽南地区津波対策会議というのがありまして、「津波から命を守る幸浦プロジェクト」、そういうのがことしの春先、３月以降発足されて、十数回、このプロジェクトの話を聞く機会があって、私もメンバーの端くれに入ってはいるんですけれども、そこでは堤防を強くするんじゃなくて、もう入ってくるという前提で、自分たちの命を守る、そういうように何かこう、もうあきらめちゃっている。だから自分たちの逃げる場所をつくってほしいというような考えですけれども、私は工場が水没したら、塩水に浸かったら、もう何もかもだめになるので、できることならば、先ほどの潮が入らない方法をまず最初はとっていただきたい。それでそこを塞げば、逃げる時間もある程度確保される、こんなように思っておるわけです。

当然のこと、費用がかかりますから、静岡県は海岸が非常に長いわけですけれども、そこ全体に堤防をつくるなんて、もちろん予算が幾らあっても足りない。だけれども、ある一定の部分だけ、その程度のことならば、自分のところだけでも自社でもやりたいなというふうに思っておりますけれども、ちょっとそういうような部分があって危機感を感じておるわけです。

＜発言者５、発言者６に対する知事のコメント＞

発言者５さんのお話と発言者６さんの話は大変共に重いお話でございました。

発言者５さんは２７年間、こうした傷ついた子どもたちを社会に復帰させるために尽力されてこられまして、その功績はまことに甚大なものがあります。そしてことしぜひ、今還暦ですか、私は６３歳ですから、まだ若い、もう一度原点に戻って頑張ってくださいということで、知事表彰を差し上げたわけです。それほどに御立派な仕事をしてこられた方です。

愛情を持って、そしてまた愛情に見守られながら子どもを育てて、また若い青年たちのために一生懸命に後進の指導や、また希望を持ってやっている人たちと同時に、そこから外れてしまった非常に厳しい愛情とは全く正反対の虐待を受けて、そしてそうした世界しか知らないまま大人になると、またそれが同じように繰り返されるので、何としてでもこれを食い止めなきゃならないと。これは津波を何としてでも食い止めて、命を失うことのないようにと、そういうのと同じように、こうした子どもたちが増えることを止めるには、虐待を受けた子どもたちの傷を癒す以外にないということで、いわば自分の人生をこれにかけておられるという方がいらっしゃることを我々はまず知りたい。

しかし一方で、職員の方もそうした野戦病院のような大変な環境、これも１日や２日じゃなくて四六時中なものですから、その人たちが疲弊して辞めていかれる状況もあるということを知りまして、障害を受けた子どもたちには場所をつくりましたけれども、こうしたフリースクールの人たちの世話をしている方の御苦労も、本当に並大抵のことではないと思いました。

私はやはり愛情と虐待がその対極にあると。そうすると愛情をいただいている人は、測れないけれども、愛情量というものを持っているんじゃないかな。そして愛情量というのは一体誰が下さるんだろうと。もちろんお父さん、お母さんが一番でしょうけれども、場合によってはお父さん、お母さんは子どもに対して自分の欲望といいますか、自分の希望を押し付けかねません。しかしおじいちゃん、おばあちゃんというのは、恐らく損得なしの愛情を孫に与えるんじゃないでしょうか。孫をかわいがる愛情量ですね。ですから愛情量があるとすれば、虐待量もあるに違いないから、その虐待量を、このマイナスの量をしっかり愛情量で埋めていく以外に、この虐待されて傷ついた心を改める方法はないと。

しかしこれは時間をかけてやる以外にないし、やはりそうした資格を持った人を大切にして、そうした志を持っている人たちが出てきて、そして一緒にその子供たちの救済に乗り出すと。それにはやはり施設あっての地域、地域あっての施設というふうに言われましたので、やはり地域ぐるみでやっていく以外にないかなというふうに思います。

その地域ぐるみでやっていくための環境づくりを市や県ができるというふうに思います。人材の偏在があるとすれば、それを適正な配分にしていくなり、あるいは施設の配置が適正でないとか、あるいは皆無であったりすると具合が悪いので、あるいはまたプロフェッショナルに学ぶために、現場の研修というものをもっと本格的にするというふうな幾つかの工夫があると存じます。

恐らく発言者５さんにはそういう御提案が、謙虚な方ですからあまりおっしゃいませんけれども、あるに違いなくて、そこをお聞きして、少なくとも袋井やこの磐田の地域からそういう人たちの割合が非常に少ないというそういう模範を市や町に投げると思います。そうするとこれは日本全国、あるいは世界中の問題でもありますが、そうしてここに地域で傷を持った子どもたちが治っていくそのシステムを発信することができるという、その点を持って虐待された子どもたちの数が少なくなっていくという好循環に変えられる。負の循環を好循環に変えるために、これはどうしてもしなくてはならない仕事だというそういう感想を持ちました。

発言者６さんのお話は、見てきたばっかりなんですよ、工場を。そこの切り通しができている。そこだけぐっと低くなっているわけですね。そしてこの１０年間、いわゆる２１世紀になってから、急に環境の問題が大きくクローズアップされまして、いわゆる温暖化で間違いなく北極の氷がだんだん小さくなっています。それで通行ができると喜んでいる人がいましたけれども、要するに蒸発する水の量、言いかえると降る雨の量、それから台風の強度、それから降る雪の量というものが多くなる。温暖化というのは、要するに水の量が多くなるということがある。それが高潮になってくると、あるいは台風になってくると、ぼーんと高台を、堤を乗り越えてくるということなんですね。

私どものやっております津波対策というのは、第三次津波対策というのがありまして、本県は発言者６さん御承知のように、５０５ｋｍの海岸線を持っています。そのうち人が住んでおられたり、あるいは工場があるというところが２８０ｋｍあります。そこにかつて安政の大地震のときに、あるいは宝永の大地震のときに、そうしたときにどこまで津波が来たか、あるいはどれぐらいの高さであったかということは調べてわかっているんですね。その２８０ｋｍの中で９０％、２５０ｋｍ分は終わっているんです。あと１０％分をしっかり、これまでの津波には対処できるというようなものとして、今１００％にしようと。

しかし、この１０年間で伊勢湾台風以来なかったと言われるものを経験しかねないような事態が、発言者６さんの目の前で起こっているということなので、そしてもう１０ｍを越す津波が来るということも十分に想定内になって、浜岡原発では１２ｍのところを１８ｍにするというぐらいにして、何とか原発の事故を防ごうとされているぐらいですから、我々の方も、そこは問題だということがわかれば、そこから手を付けていかざるを得ないと。

きょうのその切り通しのところは、いきなりこんなふうに車は行けませんので、削ってすっと車が入れるようになっている。ここを閉じた方がいいと。なぜ閉じないんですか。危険ですね。担当者がいわく、いろんな人が海岸に来て、不審火が出たりすると。あるいは海岸で何か事故があったときに救急車が入らないといけないと。これも聞いてみれば、それはそのとおりですよね。ですからこの両方がどっちかなのか、いえ両方とも必要です。ですから両方とも、救急車も、あるいは消防車も必要なときには入れるようにすると。

一方で、切り通しや何かで津波が来たときに、そこをいわば通路としてばっと部屋の中に入ってくるように来ては困るので、それも防がないといけないと。これが思案のしどころであると同時に、やるべきことです。すなわち我々はダムをつくったり、あるいは突堤をつくったりして、それは自然破壊と言うこともできますけれども、破壊された自然を直すといいますか、もう一度自然の脅威に面して、今度はそれを元に戻すとか、あるいは自然と共生するためにするのも人間の技術なんですね。

ですから人間のいろんな技術によって立派な構造物ができた。それが結果的に環境を破壊した。破壊した環境を戻すのが人間の技術なんですよ。だから元に戻れといったって、これは元に戻すことができないので、これはもう試行錯誤しながら、その都度最善と思われているものをやっていくけれども、これが完成ということはないと。

しかし問題がわかっているとそれは放置できないということで、短い時間ですけれども、あそこのところで、仮に自転車道があります。自転車道を、海のところに堤防がありますね。そして保安林がありますね。そして自転車道があって、そして第２の堤防といいますか、盛り土があるわけです。この真ん中のところがへこんでいるわけですね。そこのところに自転車道が走っているわけです。自転車道は使いますかと言ったら、余り使ってないみたい。見えるものは保安林のクロマツというか松です。松はどうかというと、マツクイムシに食われて、あんまりきれいじゃないですよ。そこであんまりロマンチックにはなれない。おれたちの恋もここで枯れるのかと思ったりして、恋人同士がロマンチックになれないということであれば、そういうところは例えばぐっと盛り上げると。そうして盛り上げると、その部分は安全ですね。そして仮に浜松の方から静岡の方に向かうときには、右側に遠州灘の壮大な海が見えますし、西側にはそれなりの保安林とか植栽が見える。緑と青い海の両方が見えるようなスカイウォークにしてみたらどうか。

そうすると、いざというときにそれは津波を防ぐし、平時にはそこはスカイウォーク、あるいは自転車道として、そのための盛り土はというと、これはいろんなところに山から

運ばれてきた土砂があって、それが堆積していますね。上手にそれを活用すれば、盛り土の材料はある。例えばここですと太田川もあるし、そうしたことをもう一度考え直しながら、津波の高さをこれまで以上に想定するということと、特に今一番弱くなっているところ、そのメリットとデメリットを勘案しながら、メリットを生かし、デメリットをなくするという知恵を絞りたいと。

一概にこれが回答だというのがありません、それぞれの場所によって違うから。ただ、袋井は平地ですので、江戸時代に「命山」がつくられた。それも原田市長に御案内いただきまして、これは忘れもしません。何しろ袋井の花火のあった日ですから。もう東洋一の花火、バーンと、何たるや東北の人たちを励ましたかと思いますよ。向こうの子どもたちもお招きしてました。その花火を見る前に「命山」に登りました。富士山に登るぐらい感動しました。

それはなぜかというと、富士山はこれは自然がつくった傑作です。こちらは人間が手でつくった、鍬を振って掘って土を盛り上げていった、わずか５メートルです。しかし海抜からすると地面があるので１０メートル弱はあるんじゃないかと思いますけれども、そこにほこらをつくられたりして大事にされている。あるいは植栽をされてきれいにされている。つまり高台で助かったという記憶があるので「命山」と名付けられているということなので、そこに今は高台はもっと簡単につくれるでしょう。

それをそういうふうに土でつくるのか、あるいは近代の技術でつくるのか、それをどこの場所につくるのか、そうしたことはそんなに難しいことではありません。ですからやれることはあるんですね。ですから幾つか、これは町で、市と市で、生活している人と一緒に、ここが人が一番来れるところだというところがあるはずです。ですから現代の「命山」を今はつくらないといけません。それは堤防のところと、それからあるとき部屋の中に水が来た場合にどうするかというそういう構造物、これも危ないときだけに使うんじゃなくて、平時には、大丈夫なときには別の用途として使えるものでないといけないと。しかしそれは同時に防災の役に立つということ。これは発言者６さんと一緒に考えながら、県議の先生もいらっしゃいますので、意見を交換しながらぼーんとこれはもうお金を使ってやってまいりたいと。

今我々はその第三次の地震・津波に対する対策をなるべく１００％にまずしてしまうと。同時に、幾つかこういう切り通しのように後から出てきた問題のところがありますから、そこについて知恵を絞りつつ、今度は１０ｍ以上のものが来たときにどうするかというこ

とで、さっき言いました自転車道のかわりに、例えばスカイウォークのようなものですね、そうしたものを今考えつつあって、今知恵を絞っているところでございます。

発言者６さんの工場だけでなくて、日本は臨海工業地帯というじゃないですか。だから京浜、中京、阪神、あるいは北九州、これ全部ご御覧くださいませ。みんな臨海、海に臨んでいるところです。原料を輸入して、そこで製品に加工して、それで輸出すると、そういうふうにして日本はものすごい経済発展をして、アジアで最初の近代工業国家になったわけですね。ですから、ほとんど日本はすべて臨海工業地帯に位置しているんです。ですから、これは発言者６さんの工場だけの問題ではないということですね。

しかし、明日来るから全部だめになるというほどのものでもないということで、できる限りの用心はしなくちゃなりませんけれども、慌てるほどのこともないと。ちゃんと臨海にずっと来て、明治の初めから輸入して輸出するということでやってきて、ここまで来ているので、何と菅前首相が向こう３０年の間に８７％の確率と言ったって、１９７８年に東海地震説が出て、東海地震がまだ起こっていませんから、明日起こるように言われても起こってないんです。起こらないというわけじゃないんですよ。しかし慌てることはないと。迅速にやるけれども、浮き足立つことないということです。

そういうことで、差し当たって発言者６さんは、あそこの切り通しを自分の会社で金出すとおっしゃっているので、それはいい話だなと思っているんです。一緒にやりたいなと。いやいや、だから一番安心、例えば浜岡原発もそうです。あれは危険だ、危険だと言っているけど、私は一番それが危険だと思っている人は誰か。そこで働いている人ですよ。そこに１０００人単位の人たちが働いていらっしゃいます。その人たちの安全をどう守るかということは、そこの人たちの会社も、そこの人たちはこちらの住民でもあります。静岡県民でありますから、それも守らんといかんということで一緒に考える。敵ではありません。

同じように発言者６さんの工場の人たちが、ここのところが問題だと言われることは、もう生活感覚、体での実感ですから。切り通しの問題でもわかった、それをどうするかということは、きょうから考えるという話です。どうぞ、急に全部何かするということになります。もちろん高台に移ってもらっても結構ですよ、新東名もできますので。ですからそれはいろいろ全体を合理的に考える中で、どういうふうにすると会社が発展するか、こう考えていただけばいい。今までは臨海工業地帯のところにつくるということで発展してきたでしょう。

しかし、これからは復興は高台の方、内陸の方がいいというふうに皆さんおっしゃって、そうすると東北の方は高台に移るといったって森です。つまり山です。一からやらなくちゃいけない。そこにどうして通うんですか。家だけつくったって、どうして通うんですか。うちは１６２ｋｍ一挙開通の、しかも日本一、恐らく東洋一のすばらしい、品質の、もう袋井メロンに匹敵する、そのクラウンメロン、クラウンロードです。そういうのが１６２ｋｍ一挙開通するので、そこも活用できると。そこも。ですから両方活用するので、プラス思考で、それはもう本当に人生何が起こるかわからないので、予定どおりいかないのでおもしろいわけでしょう。おもしろいというか不安でもありますけれども、それが人の生きるということじゃないかと思います。

予定どおりにいかないこと、それを受け入れるという我々は何といいますかメンタリティーを持っています。仕方がない、仕方がない、仕方がないというのはあきらめみたいですけれども、一方、仕方がない。しかし、必ず冬の次は春がやってくる、夜の次は夜明けがやってくるというふうにして、いきなりそれが希望に変わったりするというそういうものも我々持っています。あきらめることが同時に、よしもう１回頑張ろうというそういうことを自然からまた教えてもらっているわけで、ですからそういう我々のメンタリティーの中には、自然に対する災害、自然に対する脅威に対して受け入れると、これはいたし方ない、人間の人智の尽くせるところではなかったというそういうものと、今度はそれをまた恵みに変えていくためのメンタリティーも持っておりますので、二者択一ではありません。両方あるということで、今、発言者５さんと発言者６さんの言われた問題は、問題提起としては非常に重たいわけであります。

しかし、もし本当に傷ついた子どもが、今度は愛情プラスアルファになって、そして立派な仕事に就いた場合、恐らくそういうことを見てこられたから、発言者５さんは２７年間、３０年近くこの仕事に従事されてきたんだと思いますよ。やりがいがあると。その子はどうするかというと、きっと自分のようなふうには子どもを育てない、あるいは自分のような立場にいる人を見たら、よし自分が発言者５先生に教わったようにしてあげようと思うに違いないですから、そういう好循環を十分ではないにしても見てこられたので続けられているのに違いないんです。ですからマイナスはずっとマイナスのままではあり得ないということがあります。

この切り通しも、小さな知恵でつくったかもしれない。しかしもっと大きなことを考えれば、２～３人の人と、数万人の人と、それをどういうふうに共に救うにはどうしたらい

いかということを考える、これはいいきっかけを与えていただいたので、そういうことで、心配はよくわかりますけれども、心配だけではない、そういう気持ちも、社長さんでいらっしゃいますので、社員の方にもお遣いいただいて、問題はわかったと、具体的な問題はわかったと。それに対して、袋井市長と一緒に考えてまいりたい。非常に（机の上に飾ってある浅羽東小学校の児童が育てた）花で元気づけられましたので、人を元気にしたところは、やっぱりそれだけの力があるということだと思います。何か十分にお答えになってないかもしれませんけれども、以上でございます。

＜発言者２＞

ことし浜松なんですけれども、とおとうみオープンというゴルフの大会をやると思うんですけれども、ちょうど私たちのつくっているフリーペーパー「エコノワ」という本の絡みで、ギャラリープラザというのを７月に開きました。そのときに県の施設を使わせてもらったのですが、いろいろと不便がありまして、その時期、反公共ということで、駐車場は使うな、宣伝はするな、だめなことばかりだったんですね。でもこの世の中、今協働という名のもと、いろんなことを民間と市民と行政と一緒にやりましょうという形で動いているはずなのに、（施設が）指定管理ということになった時点で、自分たちのものを守らなきゃいけないものができて、指定管理者制度というもので難しい形になっているんじゃないかなと、感じました。その辺うまく対応できるようなことがあったら教えていただきたいなと思ったんですけれども、よろしくお願いします。

＜発言者２に対する知事のコメント＞

そのギャラリープラザのことを今初めて知りましたが、大体県の体質は今言われたとおりなんでしょう、ですから何のための仕事をしているんだと。これは静岡県民が幸せになるために仕事をしているわけです。その原点に立ってお手伝いする、環境整備をするのが我々の仕事なんです。何々をするな、何々を禁ずるとかいうのが仕事じゃないはずですね。

私はともかく一人一人が自治能力をつけていただいて、町も村も、ほとんど自分たちでできますよと。そして県の仕事も、これぐらいのことは自分たちでできますよというそういう力が出てきますと、総体的に今まで上といいますか、お上の力に依存してきた、そうしたものがこういう若い力によって少しずつではありますけれども、直りつつあります。

私の方も、私自身は教育に長く携わってきたので、教え子の能力を発掘して立派になってくれるということが仕事だったものですから、上から押さえ付けて、何をしろ、何をし

たらいかんというふうなことは、僕の思考に合ってないんですよ。

ですから役所の中にある上下関係というものがありますけれども、部長さんが一番偉いと。部長さんが何か発表している。で、つまずきますね。そうするときちっと答えられないことがあります。それは自分で書いてないからです。その下の局長さんとか、局長さんも書いてない、下の課長さんが書く。だから課長さんと直接話した方が早いです。課長が直接知事と話すことはなかったと、前は。先例がないことをやることは大変らしいです。それを今先例を全部新しい先例にしていますから、だから旧来の先例はないということが新しい先例に変わっている。知事室も開けっ放しにしまして、問題があったらそれを一つずつ解決すると。

ただ、そのだめだと言った人は、自分の仕事をしているつもりでいるんですよね、邪魔しているつもりじゃなくて。そういうことがよくないということを私はその人に申し上げたい。でも、名前を誰も出したがらないんです。私は常に固有名詞、どなたがそれをされているんですか。その人を叱責はしない。これはおかしいと思うと。しかし言い分がありますよ。その言い分を聞きます。だからといって、それを何か懲罰人事とか、そういうふうにしてしまうと、これはもう唇寂しで誰も言わなくなるでしょう。それをしないという先例をつくっていくと、なるほどということで、自分で考えて、これはＡさんがやっている、あるいはこういうグループがやっているんだから、一つうちも助ける方法で柔軟に対処すると、それを川勝に言ったと。川勝は規則を破ったということでなく、よくやったということになる。

そういうふうに一つずつその人の意識を変えていくといったって、数千人しかいません。県庁に６０００人いるという。６０００人もと言う人もいるけど、６０００人しかいないと、そういうふうに見るんです、私は。その程度なら１人ずつ１日１０人に会ったら、３６５日ですから３６５０人、２年で７０００人近くになる。それぐらいのこういうことで、一つずつ変えていくと。これは何々の課の担当ですけれども、誰が担当しているんですか。全部固有名詞です。

しかしそれは相手をいじめるとかいうことでなくて、君が仕事していると。何々課の仕事ですというのでなく、誰が仕事をしているんですか。あなたは何をしたのですか。あなたが何課というのは、あなたが何をしたかというのに尽きるということで、そういうやり方でやっておりますので、交通課の者ですと、交通課のどなたですか、全部固有名詞を聞いていただいて、そういうことで、それ自体は別にうかつに知らなかったとかいうことが

ありますので、改めればいいんですから、改めればその人は力をつけます。そういうようにしてやってまいりたいと思います。ただ、このギャラリープラザについて御迷惑をかけたことにつきましてはお詫びしておきます。申し訳ありませんでした。

＜発言者５＞

今月１１月はたまたま児童虐待防止月間ということで位置づけられているんですけれども、ことし３回目なんですけれども、静岡でも児童虐待防止静岡の集いというものをやっていまして、県の方も主催団体になって官民一体でやろうということで、特に児童養護施設の職員、それから民生・児童委員さん、それから里親さん、それから社会福祉協議会、いろんな関係団体、母子支援施設、それから乳児院の職員も出るんですけれども、一体となって、声を出せない子どもたちにかわって、この児童虐待の実態を市民の皆さんに知っていただこうという集いをやっていまして、４００人規模でやっています。

今回は１１月１２日土曜日ですけれども、午後から県庁の近くの社会福祉会館でやるんですけれども、そこから集会が終わってからパレードをして、県庁を通って、呉服町を通って、小梳神社が解散場所になっているんですけれども、そういう催しをやっています。それでことしは幸いなことに副知事さんにも出ていただいて、先頭になってパレードにも出ていただくことになっているんですが、ぜひ来年知事に出ていただいて、先頭に立っていただいて、我々関係機関本当に最前線でやっている奮闘している職員のためにも、とっても大きな励ましになると思いますので、来年必ずやりますので、ぜひお願いしたいなというふうに思っています。私今その実行委員会の事務局をやっていますので、ぜひお願いしたいと思います。

＜発言者５に対する知事のコメント＞

１１月１２日の午後に今月が児童虐待防止月間になっていて、静岡でそれがあるというのは、今初めて知りました。知らなかったです。知っていたらどうするかなと思いますけれども、明日の予定も実は私十分に心得てないんですよ。今その日暮らしでありまして、次何ですかという、そういうような日程で動いております。ただ、例えば県議会は１２月議会がありますけれども、１月にはどこそこの方とお目にかかりますよというようなこと、それがいつなのかということは、じっくり予定を見ている間もありません。

私はきょうはうっかり手帳も持ってきていませんけれども、手帳も人が書いているんで

す。書き切れないので１枚のＡ４の紙に書いたようなもの、それが予定表です。それにかかわる資料がたくさんございますので、それは原田市長さんも一緒だと存じますけれども、そういう形で動いておりまして、二人副知事がいるんですが、どっちですか。（「大村」）大村副知事が出てくださるということでございますが、三位一体で、恐らく彼らもそれに似た生活しているんじゃないかと思いますけれども、実は私きのう、おととい、さきおととといと台湾に行ったんですよ。

台湾の飛行機の定期便が飛んでくれるかどうか、これは新潟県と、それから富山県と鹿児島県と静岡県で争っているというんですね。それでどうしても行ってくれということだったんですが、行って、いろんな人に会って何を言ったらいいんですかというと、これから台湾へ行く、目的は何ですかと、飛行機に乗る直前に聞くとかいうふうなことで、帰ってきたら、誰それに会って対談しなくちゃいけない。

実はきのうある方と対談をして、それは「ふじのくに」という雑誌に載りますけれども、それも帰りの飛行機の中で、きょうはすぐに静岡県には帰れないで、東京でその人に会っていたただきます。何がテーマですかと。その直前に必死に読む。彼とは４時からの対談の予定でした。そしたら彼は３時に来ちゃったんですよ。その１時間の間に読もうと思っていた資料が読めないのでぶっつけ本番ということになります。

そんなことで、私の日程は他の者が決めてそのとおり動くんです。そういうようなことで、決して避けたというわけじゃなくて知らなかったんです。大変失礼いたしました。どうも申し訳ありません。来年のいついつと、一応今しっかり頭に入れました。

＜傍聴者１＞

袋井の発言者６さんと同じ地区に住んでいます。６０歳になります。そこは幸浦と呼ばれているんですね。ここに書いてありますように幸せの浦ということで、昔は海岸が非常に、発言者６さんも言われましたけれども、白砂青松で、後ろにパネルがありますけれども、そのパネルにしてもいいぐらいの海岸だったんですね。私が小学校のころは、そこで駆けっこをしたり、ソフトボールをしたりということです。けさ川勝知事も行かれたということですけれども、どう思われたのか関心がありますけれども、今はもう見るも無残な小グランドキャニオンという形ですね。台風の後は自転車道が破壊され、そして浜の面積が縮まっちゃうというくらいになっています。

その原因は先ほども発言者６さんが言われましたけれども、突堤、福田港は避難港らし

いですけれども、その突堤を長く延ばせば延ばすほど、こちら波がに来ていると。プラスの反面、マイナス面が起きていると。やはりこれは知事が言われましたように、プラス・プラスの方向でぜひいってほしいなと思うんですね。今の新しい子どもは、昔の白砂青松は見ていないです。言葉では言われています。これは自然に対する、あそこの突堤がある限り、永久にこの戦いは続くんじゃないかなと思います。税金の無駄だと思います。一番いいのは、あそこの突堤を、防潮堤を取り除くことだと思うんですけれども、あそこまで長く要らない。プラス・プラスの方向にできるように、ぜひ御検討をお願いしたいと思います。ちなみにあそこを管理しているのは袋井土木事務所です。

＜傍聴者２＞

市内でパソコンの教室を開いております。インターネットの件についてお願いの件がございまして、今皆様方のいろいろな御意見を聞いておりますと、やはり情報を共有するとか、発信するとか、あと学びですね、そういうことがキーワードになっていると思います。それで御存じのように、さっきの浅羽の件もそうですけれども、防災については、やはりすばやい情報発信と、すぐ５分以内に逃げなきゃいけないというような面とか、あと今電力問題、太陽光を使ったスマートグリットということとか、医療問題については、これから電子カルテ、今月から県の方にクラウドコンピューターが導入されていますけれども、そんな形で市民・県民の使いやすいようになると。

あと高齢化問題についても、買い物難民ということで、インターネットを使った買い物がこれからはやってくるだろうというようなことで、インターネットを活用した施策がこれからいろいろな課題についての解決のヒントになると思いますので、そこで今現状、県内のブロードバンドが、この前川根本町で住民投票がありましたけれども、あれはちょっと問題点が違うと思うんですけれども、県内のインフラ整備は結構進んでいると思いますけれども、やはり県がある程度そのインフラ整備を担当すべきじゃないかと。それで市町は、やはり高齢化が進んでいますので、使えないお年寄りとかいますので、市とか町が公民館を活用して、ＩＴを学ぶというような形で役割分担を明確にした上で、いろいろ防災とか、いろんな社会問題についてお互いに学び合うというような形で、県がリーダーとしてそのビジョンを出していただきたいなと、そういうように考えております。

＜傍聴者３＞

４月に出産しました２８歳です。最近新聞でがれきを前向きに受け入れると、県内でも受け入れる市町が多く不安を感じています。というのも、福島県から遠く離れたお母さんの母乳から、放射線物質が検出されたりですとか、あと農作物から次々と出ている問題もあって、どのように育てていけばいいのかという不安を感じています。

放射性物質を含んでいるがれきを受け入れるということは前例がないので、将来どういうふうになっていくのかという不安があります。この先、放射性物質は何十年も半減期にかかると言われていますし、もし受け入れたら、何十年もその間、そういった環境の中で子育てをしていかなければいけないのかなと感じてしまっています。もしできましたら、そういった不安や心配のない中で育児をしたいと思いますし、次の子もそういった環境の中で産んであげたいと考えています。

東海地震が起きると言われている静岡県ですので、助ける側に立ちたいという立場もわかるのですが、助けた側も力にされてよかったなと思えるような方法を丁寧に検討していただきたいと感じています。お願いします。

＜傍聴者１、傍聴者２、傍聴者３に対する知事のコメント＞

どうも３人の方、それぞれ大事なことを言っていただきまして、この幸浦ですね。これはここだけの問題でなくて、例えば松崎という西伊豆にありますけれども、防潮堤を二つつくった。そのために川が土砂を運んでくるんですが、それが今までは海にざっと流れていたんですけれども、土砂が波止場の中に溜まるようになって、すぐに浚渫しなくちゃいけない。だから今それを壊している。ところが理想を持ってつくったんですね、大きな船がもし何かのときに人を助けられるようにと。今壊している。どうしたらいいかと。

今回の福田の突堤も、例えば土砂が来るように、あるいは潮流がある程度元に戻るように、中にトンネルといいますか、空間をつくって潮の流れを戻すとかいうことも考えられるかもしれません。その辺が工夫のしどころですね。袋井土木事務所が担当しているということなので、もう一度この点は、せっかく幸浦と、私はどんな印象を持ったか。

これは子どものときには皆さん方２００ｍぐらいずっと向こうまで砂浜があったという。ぱっと見たら、きょうはそこに若い発言者２さんみたいな美しい方々がサーフィンされていたんですよ。きょうの波はどうですかと言ったら、いい波だっておっしゃっていまして、昔と比べると非常に砂が少なくなっていると。初めて来た人の中にはいいところだと思う人もいるので、少し知恵を絞って、豊浜と幸浦でけんかすることないようにしてほしいと。

そのけんかの材料を袋井土木事務所がつくっているということは最悪なので、これはちょっと両方のお話を聞きながら、知恵を絞らさせてくださいませ。

それからパソコン教育をしていただいてどうもありがとうございます。もうおっしゃるとおり、防災においてはインターネットというか、情報というのは本当に大切で、今情報を生かされている分野で医療でしかりという話、あるいはインターネットで買い物ができるとか、高齢者にとって楽になりますから、ドア・ツー・ドアで配達もできると。何よりも防災ということが大事で、その情報についての技術がなかなか学べない。あるいは初めから警戒している人もいらっしゃるので、そうではなくて自分の安全のためにも簡単に使えるということで、公民館などを利用してくださっているというのはありがたいことです。

我々の方は、その情報を通して仕事の合理化もできます。いわゆるＩＴですね。テクノロジーを使ってできるということで、今そうしたオフィサーすら置こうかというふうな動きも出てきておりまして、民間で活動してくれているあなたのような方々とともに、防災のときに携帯電話一つ持っているだけで、衛星を通じて、すっと現地の情報を伝えることができるし、自分の居場所も、その現場の状況もちょっとした操作を覚えるだけでできるというようなこともあって、今回の東日本大震災を通じて、情報不足になることがいかに助かるべき人が助からなかったということも痛感しておりますので、おっしゃっていただいた問題点は共有しております。情報先進県になるように努力してまいりたいと思います。

それからお子さんお生まれになって、どうもおめでとうございました。何よりでございます。１人でも２人、３人と育つようにと思っておりますが、安心して育てることが大事で、それで福島県、あるいは宮城県、それからさらに北の岩手県ですね、こうしたところのがれきが膨大なものなので、環境省がほかの県でも引き受けてあげてくれませんかというふうにこの４月に言われたんだそうです。それでこんなもの、東北のあんながれき、放射能を含んでいるものだったらどうするんだということで、すべての町がノーと言われたんですよ。それでもそれを知ったのが２週間ほど前のことでした、私は。

それで静岡県と、それから磐田市も袋井市も、３５の市町が岩手県を本県は担当するということで、一番北の岩手県の遠野というところに拠点を置きまして、３月の１９日から９月の末、１０月初めまでですね、ずっと助けてきたんです。遠野というところの東側に釜石という製鉄所で有名な、あるいはラグビーで有名な釜石がある。その北側に大槌町という町があって、その上に山田町という町があるんです。その釜石の北にある大槌町と山田町は、全部壊滅したんです、津波で。ということは、家が流された、工場が流された、

お店が流されたということで何もありません。大槌町の町長さんは自らの命も亡くされました。山田町の町長さんは自分の家を流されました。そうしたところを東北地方だけでは助けられないので、こちらに頼むということで、１週間に１回行って助けてきました。

それでどういうふうにしたら再建できるかということをかなりの人がしているんですね。そのためにはまず掃除しないといけないということで、彼らは何かしてくれと言わないんですよ。それで我々がそこの生活現場に入って救援活動しているので、例えば「今生野菜が必要ですか」と言ったら、「そうなんです」というふうに言われる。そういう人たちです。我慢するから。「何が必要ですか」と言ったら、「いや、もういろいろとやっていただいてありがとうございます」ということしか言わないような人たちです。

その人たちが、お父さんを亡くした、お母さんを亡くした、あるいはお子さんを亡くしたというような人たちがいらして、何とか生活を再建したいと言われているというそういう現場を知っていて、さてどうしたものかということで、それで本県にはいわゆるごみ処理場というのは県が関与していません。市町が関与されている。で、私が申し上げたのは、そのがれきは自分たちで、だって人がいないんですから、人手がなくなって、三陸というのは不便なところです。そこでがれきの処理もできないと。どうしたらいいか。津波でやられて、それでごみもたくさん出ますから、自分たちのごみを自分たちで処理するというのは基本です。リサイクル・リユース・リデュース、３Ｒの基礎です。

それで、余裕がありますか、ごみ箱に余裕がありますかと。そしたら余裕は、例えば１００トンのごみを処理できると。９０トンで終わっちゃったので、あと１０トンあると。１０トンの１％を引き受けてくれませんかというふうに申し上げたんです。ただし向こうから持ってくる。福島の、あるいは宮城県のではありません、本県がよく知っている、人的なネットワークがある人たちの大槌町と山田町の方々のごみ、そしてそのがれきですね。

それで今度はそのごみが、がれきが放射能に汚染されているとあなたがおっしゃったように、その半減期が長く影響力が強く残って、甲状腺の病気になったり、いろんな障害を起こしますから、そのがれきを出すについて、その毒物みたいなものを出していたら、それはもう彼らだってそんなことしたくないでしょう。

したがって、細野大臣のところにすぐに参りまして、あなたは持っていけと環境省に言ったそうだけれど、そんな乱暴なことはないと。福島の原発事故の放射能を外に持っていって、日本中を汚染することになると言いました。大臣は違うと。自分がきちっと責任を持って、出すべきごみについては、そこで検査して、影響のないものだけを持っていくと

いうことを保証するとおっしゃったんです。大臣がそう言ったんです。

それを持って帰ってきて、余裕があるところで、もし１％、余裕のある分のですよ。１００トンの中の１％１トンじゃありません。余裕が仮に１トンしかないと。１トンの１％、その分だけ入れていただいて、そこで燃やしてくれませんかと。東京は石原慎太郎知事が、「どれ、助けるのは当然だろう」とやったんです。それは違うと思った。

そうじゃなくて、大槌町と山田町は我々が助けてきました。静岡県が全国知事会から頼まれて、そして大阪府、和歌山県、長野県と一緒に助けてきた。我々はそこのところしかやっていません。そこの人たちに対して心のケアをし、子どものケアをし、精神をやられている人とか、文字どおりいろんなすべてのここで言われたようなことが一挙に噴出しているんですね。そこで一番の、自分たちの元の家には戻れないにしても、ともかくがれきを少しでも片付けないことにはだめだということがわかったので、それでやってくださるところがあるならば、環境省の大臣が保証して、そこで検査をして、放射線量は実質ないに等しいと。空気中に放射性物質がありますから、皆無というのはあり得ません。そうしたものを検査した上で持ってきて、余裕の中の１％分をほかのものと一緒に燃やしてくださいと。そうした場合には、それが人体に影響があるということはないと。私は何か格好つけて、自分たちのことがまた向こうにあるからということでなくて、ともかく向こうが困られている。そしてそれがないと苦難な生活がずっと続きかねないということで、今はお願いをしているところです。

ところが今あなたもお気づきのように、ひょっとすると受け入れてくださるところが出てきているかもしれません。それはどうしてかというと、当初は東日本大震災で出たあのがれきを都道府県で受けてくれるところはありませんかというふうに一般論として言ったから受け入れなかったのです。だけど、私は静岡方式で、申しわけないけど福島県ではありません、宮城県ではありません、その北の釜石というちょうど真ん中のさらに北にある大槌・山田町のその方々のがれき、それはものすごい量なんですよ、実を言うと３５万トンぐらいあります、燃やす分だけでも。そこで１トンでも、だってほとんど役に立たないんです。だけどしないよりはいいと。何もしないよりはいい。見過ごすことができないと。だから余裕の中の１％をやってくださる町があるなら、ともかくそこからやってみようという気持ちでいるんですね。

こちらで生まれ育つ子どもがそういう有害物質の中で育つということはあってはなりませんから、それはしっかり出すときに検査し、入れたときに検査し、そして燃やす。ごみ

処理場の余裕の１％ですから、仮に１００トンあって、９９トン使って、１トンの余裕しかないと、１トンの１％です。そういうことで気は心、心だけど気持ちばかり。しかし気持ちだけではなくて形にするのが大切ではないかと、お願いしているというのが今の状況でございます。御心配されているのはよくわかりますので、それを踏まえた上でこういうことを申し上げているということで御理解いただきたいと思います。ありがとうございました。